

敗戦後の一九四六年二月、米軍との戦いで多くの戦友を失って帰郷した元少年水兵の渡辺清は、日本の保守政権を批判し、「なぜ指導者がアメリカにくっつくことしているのか」「要するに打算だ。金だ。損得のためにはなりふりかまわぬというわけだ」と日記に書いた。

朝鮮戦争中の一九五三年五月、米軍支援の朝鮮派遣の可能性についてインタビューされた保安隊(自衛隊の前身)の隊員はこう答えた。「それはおことわりします。われわれはことわる権利はあると思っんです」「外国の軍隊が上陸したという時は、妻子とか一般の人たちにとって共通の災難だから、ぼくひとりだけ命がおしいなんて思わんです。だけと国外派兵ってのは大死ですな……。どう考えても、一般の人がのんきにいて、ぼくらだけが死地におもむくというのは……。そんなことになったら妻子がかわいそうというより、申しわけない気持ちですよ」

やはり朝鮮戦争中の一九五二年四月、雑誌『世界』の編集長だった吉野源三郎は、米ソ両大国どちらにも与しない中立平和主義を訴えてこう記した。「大国といえども服すべき道理の存在することを信じ、道理の上に立つて主張すべきことを主張すること」を掲げて、ここに私たちは自



小熊 英二

慶応大 総合政策学部助教授

おぐま・えいじ 62年生まれ。87年東京大農学部卒。出版社勤務の後、98年東京大教養学部総合文化研究科国際社会科学専攻大学院博士課程修了。慶応大講師などを経て、00年4月から現職。著書に『単一民族神話の起源』(新耀社)＝サントリー学芸賞、『<日本人>の境界』(同)、『清水幾太郎』(御茶の水書房)など。『<民主>と<愛国>』(新耀社)で第3回大佛次郎論壇賞、毎日出版文化賞受賞。

## 戦後の「声」を活かし直す

# 過去知り未来開く議論を

己の独立を保つことができよう。かかる気魄を喪失して、どうして敗戦後の挫折から立ちあがることができよう」

### 現在を見直す鏡に

今回の大佛次郎論壇賞を受賞した拙著『<民主>と<愛国>』では、敗戦から一九七〇年前後までの戦後思想を検証し、敗戦後の人びとの「声」を多数集めた。こうした「声」は、完全無欠の模範ではないが、現在の私たちを見直す鏡にはな

る。こうした本を書いた背景には、一九九〇年代後半から、「戦後」を問い直す論調が高まったことがある。歴史教育問題で「戦後教育の弊害」を説く動きが台頭したことはよく知られるが、「中流崩壊」や「学力崩壊」をめぐる議論でも、隠れたテーマとなっていたのは、経済や教育、政治などあらゆる分野で「戦後」が終わりつつある」という認識であった。

### 「愛国」としての護憲

「愛国」としての護憲 一例を挙げれば、憲法の問題である。敗戦後の進歩派や知識人たちは、憲法が占領軍によって強要され

体制、経済における終身雇用、外交における海外派兵問題など、それまで慣れ親しまれてきた枠組みが流動化した。

たことに、概して批判的であった。彼らが一九五〇年代前後に憲法擁護に転じた大きな要因は、冷戦激化にともないアメリカ政府が対日政策を

変更に、日本に再軍備や海外派兵を強要するようになったことへの反発直すことが、いま求められている。国内および国際秩序が流動化するなかで、「戦後」も過去の一部となる時代になった。未来を開く議論を行うための基礎として、過去の「声」に耳をすまし、それを現代に活かす直すことが、いま求められている。

### 目を閉ざすことなく

「過去に目を閉ざす者は未来に対しても盲目となる」という言葉は、戦争責任問題などを論ずるさいによく引用される。二十一世紀に入り、

今回の大佛次郎論壇賞を受賞した拙著『<民主>と<愛国>』では、

敗戦から一九七〇年前後までの戦後思想を検証し、敗戦後の人びとの「声」を多数集めた。こうした「声」は、完全無欠の模範ではないが、現在の私たちを見直す鏡にはな

たことに、概して批判的であった。彼らが一九五〇年代前後に憲法擁護に転じた大きな要因は、冷戦激化にともないアメリカ政府が対日政策を

変更に、日本に再軍備や海外派兵を強要するようになったことへの反発直すことが、いま求められている。

### 黒板

朝日新聞文化財団04年度助成先募集 対象はコンサートや展覧会など音楽家や画家らが開く催しで、プロをめざす若手の事業も対象。芸術的水準が高く、地域の文化向上に貢献する企画を重視する。 助成金額は1件あたり数十万円から100万円程度。来年1月31日に締め切り、3月に開く同財団へ。